

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ: ニュース・レターNo.67(2019年12月号)◆

月日の経つものは早いもので、2019年にお届けする最後のお便りとなりました、会員の皆さま、どうぞよい年末年始をお迎えください。

ご愛読の会員の皆さまには、ニュース・レターとともに「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【ブログ用エッセイ募集】

会員向けブログでのエッセイは、お楽しみ頂いていますでしょうか。会員向けブログでのエッセイは回を重ね、第35回号にはインディアナ大学の黒宮広昭さんが「言論の自由とその危機」をご寄稿下さいました。これまでも国内外の多くの方から研究上の興味深い逸話をご執筆いただいております。このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員のの中から募っております。研究に関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なされたい方は、原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しくは、事務局までご連絡下さい。

【第132研究会】(11月30日(土)午後2時30分～5時)

・土屋礼子(早稲田大学)「ハワイ OWI で製作された宣伝ビラ『朝鮮自由報』について」

ハワイ大学ハミルトン図書館での資料調査で得た新資料を踏まえ、戦時情報局(OWI)ホノルルで製作された、新聞形態の宣伝ビラ、特にハンガールで書かれた『朝鮮自由報』について、その雛形となった日本語の新聞形態の宣伝ビラである『まこと』『布哇週報』『マリヤナ時報』と比較し、その内容と制作者・製作状況を検討した。

・須藤遙子(筑紫女学園大学)「マーク・メイ報告書に見る USIS ジャパンの文化工作」

2019年に出版された共訳書『対米従属の起源「1959年米機密文書」を読む』について、「マーク・メイ報告書」がUSIS ジャパンの業務を評価した報告書であり、米国による対日文化工作の内容を詳述したもので、その正確な日本分析と具体的な内容から全訳が必要な重要な文書であることを述べ、京都大学や特定の個人に対する働きかけの具体的な例を挙げて説明した。

●1月以降の20世紀メディア研究会の開催予定は、2020年1月25日(土)、3月28日(土)、4月25日(土)に予定しております。研究会でのご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務局 m20th@list.waseda.jp まで、メールにてご一報下さい。

【コラム:ロシア公文書館を初訪問】

今年の夏、資料調査でロシアの公文書館へ行ってきた。これまでもアメリカ国立公文書館(NARA)へは何度も足を運んできたが、近年、戦後日ソ文化交流史をテーマに研究を進めており、いつかモスクワの公文書館へ調査で赴きたいと考えていた。念願かなって、9月に出張で訪問することができたので、その利用手続きを簡単に紹介したい。ただし、モスクワにはいくつもの国立公文書館が存在するので、ソ連共産党関係文書を所蔵するルガスピ(ロシア国立社会政治史文書館)、連邦政府文書を所蔵するガルフ(ロシア連邦国立公文書館)の二館を念頭において執筆していることをおことわりしておきたい。

まず、モスクワの公文書館は、7月下旬と8月下旬、閉館する機会が多いので、公文書館ウェブサイトですべての下調べしておく必要がある。次に、外国人研究者の場合、所属大学などをロシア語で記した紹介状(ピンシモー)を持参する必要がある。紹介状のテンプレート(ワード文書)は、知り合いのロシア人研究者から提供頂き、大学・学部、研究テーマなどの必要情報を記載し、所属長の印を押してもらう必要があるということなので、筆者の場合、所属大学の学部長に署名・捺印してもらって持参した。そして、ロシア訪問前に、何を研究するか、テーマや史料については事前に準備をしておく必要がある。フォンド(文書庫)、オーピシ(目録)、ジェーラ(ファイル)の情報は、現地で調べることは無謀なので、事前に公文書館サイトの検索し、これらの情報を集めておく。資料カタログは、ほとんどロシア語であるが、アメリカの大学サイ

トには一部英語のものもあるようだ。

このようにして、公文書館へたどり着くことができたとしたら、入館証(プロプースク)を発行してもらうことになる。モスクワの幾多の公文書館では、各館がそれぞれのポリシーで入館証を発行している。申請書類も手書きだったり、PCで作成したりだったが、自分の研究テーマをロシア語で書く必要があるので、事前に準備しておいた方が手続きがスムーズに進む。大変なのは英語がほとんど通じなかったということで、近くにいたポーランドからの大学院生や、偶然閲覧室にいらした富田武・成蹊大学名誉教授に手伝って頂いて完成させることができた。このほか、公文書を資料請求してから出てくるまで結構時間がかかること、コピーを依頼すると一週間程度かかることなど、いろいろな問題もあるが、志さえあれば、何とか資料にたどり着けると思えるようになった。現地でのロシア人協力者がいれば、なお心強い。

アメリカに比すまでもなく、ロシアの情報公開の姿勢は問題も多いが、今回の出張では興味深い日ソ文化交流関連資料も閲覧できたと考えている。なお、電子辞書の持ち込みは可で、紙版の露和辞典の持ち込みは不可という情報もあったが、筆者の場合、普通に紙版辞書を持ち込んで作業を行うことができたことはありがたかった。

以上記してきたように、さまざまなハードルはあるかもしれないが、旧ソ連時代を知る者としては、こうしてかつての歴史を探索できるようになったことは感慨深い。ちょうドルガスピの一階フロアでは、コムンテルン100年「理想と人民の運命のドラマ」の展示が行われていて観覧することができた。[12月18日付 文責：吉田則昭]